

6

中島友玄の「種痘諸事留」

—岡山県邑久郡における江戸後期～明治初期の種痘の変遷—

中島 洋一¹⁾、木下 浩²⁾¹⁾中島病院理事長、²⁾元岡山県立博物館学芸員

瀬戸内市邑久町北島の中島家には膨大な医学資料が残されている。それは解体新書などの古医書や写本、多くの古文書や当時製造された薬の実物など江戸時代以降の貴重な医学資料であり、それらの資料群の中で中心となるのが、中島友玄が残した資料である。

中島友玄は文化五年(1808)生まれ、鴨方藩医武井養貞の弟子となり、京都では吉益北州などに医学を学んだ。天保八年(1837)帰郷し、父宗仙の跡を継いで開業、在村医として地域の医療に多大な貢献をしたが、明治九年(1876)に亡くなった。友玄は非常に筆まめな人物で、書状や古文書、自分が差し出した書状の控えに至るまで多くの記録を残した。これらの資料群は、江戸後期～明治初期にかけての在村医の詳細を明らかにする貴重な資料である。その中でも異彩を放っているのが「種痘諸事留」をはじめとする種痘に関する記録である。

嘉永三年(1850)正月、緒方洪庵によって備中足守にもたらされた種痘は、県内の在村医によって瞬く間に県内各地に広がっていった。洪庵から分苗された備前金川の医師難波抱節が訳した『訳引痘略』には早島・撫川・帯江などで千有余人、同じく抱節の著した『散花新書』には嘉永三年二～四月に三千人に種痘がなされたと記録されている。その他にも備中築瀬や作州津山などに伝播していき、足守は岡山県における種痘伝播の中心となった。このように県内各地で行われていった種痘であるが、洪庵の足守藩と比べて友玄の住む岡山藩の出足は遅く、明治三年(1870)の岡山医学館設立まで藩としての目立った動きはなかった。専ら在村医を中心に種痘が行われていたため、個人の種痘施術の記録は散見するものの、実際の記録はほとんど残されておらず、種痘伝播の詳細やその実態などは明らかになっていない。

やがて明治三年(1870)、岡山藩は一般開業医の種痘を禁止するとともに除痘館を設立、翌四年には任命された種痘医が各郡内に置かれた種痘所によって種痘を行い、岡山における近代種痘制度がスタートする。友玄はこの種痘医となり、邑久郡の牛窓種痘所で種痘を行っている。遡って、安政元年(1854)、洪庵が足守に種痘をもたらせてから五年後、抱節の弟子と思われる横山元長から種痘術を学んだ友玄は、自宅にて種痘を始めている。その一方で自宅から南に山を越えた邑久郡神崎村に郡内の仲間の医師と除痘館を設立、紆余曲折はあったものの種痘を施術している。江戸期における岡山藩内の種痘館の記録は、この神崎除痘館以外に例を見ない。県下を見ても、洪庵が開いた足守の葵丘除痘館、津山の除痘館、備中鴨方の種痘館など存在は確認できても、その詳細はほとんど明らかになっていないことから、この神崎所痘館の記録は当時の様子を知る上で大変貴重である。明治九年、亡くなる直前まで種痘を行っていた友玄の遺志は養子の哲(たもつ)が受け継ぎ、種痘医となって抱節の息子難波立愿とともに種痘の普及に力を尽くしていく。

種痘が伝播した江戸後期、自ら種痘術を学んで在村医として個人で施術をする一方、仲間とともに組織としての種痘館の設立に尽力、明治になってからは新しい制度に乗っ取って種痘医となり、公的な立場から種痘を進めていった友玄の人生は、そのまま岡山における種痘史の一面を物語るものであり、今まで明らかになっていなかった江戸後期～明治初期の岡山における種痘のミッシングリングを埋めることになる。

この発表では、「種痘諸事留」をはじめとする友玄が残した種痘に関する資料を検討し、友玄の種痘医としての動きを見ていくことによって、岡山の種痘史の一側面を明らかにしていきたい。